

世尊の成道

本願

太子としての世尊の胸中に燃ゆる道心は、無常を諦観して、いよく明らかに、国を棄て、財を棄て、位をすてしめた。

宝冠も、瓔珞も、宝剣も、珍妙の衣もすべてを捨てて、山に入らしめた。しかし、そこにはまだ、目指す苦行が、学問があり、三仙があつた。けれども、それらの深い学問や、道術を教えるはずの賢人たちも、世尊の深い願に答える本当のものを用意してはいなかつた。

世尊の求めたもうものは名利ではなかつた。単なる学問ではなかつた。死後天上の果報でも、この世の幸福でもない。その他この世の何物でもなかつた。ただ、魂の声、衷心の願いの満足であつた。無上道であつた。永劫久遠にゆるぎなき大道の成就であつた。罪悪、苦悩に流転輪廻する一切衆生の救われる道であつた。

世尊はすでに、人間の貪欲による私利私欲、個人的幸福を棄てられたのだ。否、個人的幸福を求むること自体が、大苦悩、大不幸の因たることを知りたもうたのだ。しかして一切衆生は、ただ痴おろかにしてこれによつて生死に流転する。与えられるいかなる説にも、学問にも、この「我」があるではないか。

世尊は、それらのすべてと別れたもうた。しかしそこには最後の道として苦行が残されてあつた。

そこに、勤苦六年の苦行が始められた。

1

道心のみあり

勤苦六年。苦行にもまた何もものなかつた。禁欲苦行、それによつて何が生れよう。そこには、肉体のいたずらなる苦痛と、疲労があるばかりではないか。

今や、世尊は、全印度の社会が承認して疑わぬ、樹下の禅定苦行をすら棄てたもうた。

父の王が太子のために付けた阿若憍陳如等五人の守役は、太子が苦行を棄てたもうや、「太子は墮落せり」とて、捨てて走ってしまった。

社会の長き無意味なる因襲たる苦行を棄てることは、同時にそれは全印度の社会から棄てられることであつた。

太子はすてられた。一切をすてた太子は、同時に一切から棄てられた。そこにあるものは不動の道心のみである。ただ衷心の願の炎のみである。

この心事

世尊には、初め王位が、三時殿が、美女が、心にまかす追従者が、その他百千万のものがあつた。しかし、それが道心の進展と共に段々とすたつて行つた。大海から湾に、湾から河口に入るように、そしてついに今や、一物も残さず、一人を残さず、捨てたつてもうたのである。

凡人は世尊とは反対に、動かすことの出来ない道心を持たず、それ故に、捨てるどころか逃げてゆき、亡んでゆくものをその後を追うて行こうとする。

哀れ、物欲と名利欲以外になき凡夫は、世尊とは反対に、物に、名に、愛に引きまわされて、引きまわされて、その後を追うて走る。無常のもの、消えるもの、泡の如くはかなく。胸中は、朽ちはてた空家の如く、あわれに、汚く、臭く、暗きにかかわらず、それを知ることもなく。

世尊は道心のみである。道心の前には人が来るか去るかすべて問題ではない。すべては去った。ただ世尊の道心のみ光る。

世尊のこの心事を理解することが出来ない者に、一貫求道精進があり得るだろうか。

聖人にもまた、こうした風光が二十九歳の聖人のすべてであった。衷心の願のままに歩みたもうこと二十年、その果ては一切の宗門と別れ、人と離れて、救われざる自己を抱いて天上天下、ただ独り大地に立ちたもう。

この心寂しく、この心あわれなり。されば、ただ、青春の感傷は、悲しみに似て、全くその趣きを異にし、早く肉身を失いて人生の孤独に泣く者の心事に似て、それにも異なる。

ただ、真実を求め、教えを求め、自覚を、救いを求めて、しかも与えられざる者の悲痛である。

たすけ

世間に下りたちたもう菩薩の相、あくまで衆生に随順して、身にも心にも塵垢あることを示して、尼連禪河に入つて沐浴して、身を清められた。

苦行に疲れ瘦せ衰えたもう世尊は、今や、河を上りたもう力さえない。その時「天、樹枝を按じて攀じて池を出ずることを得しむ。」天の神々は、樹の枝をたわめて、助け河を上らせた。

人が助けねば、天が助ける。

虚偽は虚偽と共にあり、真実は必ず真実に助けられる。いかなる時にも絶対に一人ということはあり得ない。不動の道心故に、全印度が去つた時、天が助ける。その時、多くの靈禽とりが飛び来つて世尊をとりまいて、静かに仏陀伽耶ブツダガヤに歩みたもう世尊に従い護る。

今や、素裸のまゝ大自然の前に立ちたもう。人間の一切の虚偽を超えて、大自然の親の懐を背景として、人間に与えられた使命發揮の一筋道を、その最後の段階に至りたもうた。

一切衆生救済の還相摂化の大悲は、ただ世尊の成道によつて大地の上に具体化するのである。しかもその時、無明煩惱ぼんごに跳つて虚偽を虚偽とも知らぬ衆生は一人も世尊に従わず、世尊に翼した従うものは不可思議なる小鳥たちのみであった。

吉祥

世尊はついに菩提樹下に至られる。世尊はそこではじめて人間に会われる。吉祥がそれである。吉祥とは草刈男である。

「汝の名は何であるか。」

「私は吉祥と申します。」

「しからば我も必ず大吉祥を成就するであろう。」

まことに世尊は永劫三世を貫く大吉祥を成就されるのである。世尊は彼より草を受け取って座としたもうたのである。

大経には「吉祥感徴して功祚を表章す」とある。感徴とは、徴瑞めいてんざいしを感知することであり、功祚とは功は功果、祚は福祚で、世尊の無量無辺阿僧祇劫の願行成就して、今やその功德は、正覚の果を成就せんとするのが功果である。かくして得たもう幸福なる世尊としての位を福祚と言うのである。

吉祥は、世尊の功祚を表章するために草を奉るのである。

世尊の新生涯は苦行を棄てたもうに始まった。貪欲中心の人間がみな去って、たった一人尼連禪河に立ちたもう時、まず天が助けた。ついで河を上りたもうや、靈鳥がその側を守った。村の少女は乳を献じた。そして今、草刈は座具としての草を奉った。

我等は不可思議なる感銘に打たれる。

人間はしばしば行きづまったと言う、果して行きづまったのであろうか。

世尊にあつては、一切が去って行ったその究極は、一切の帰って来る最初であつた。

凡夫は内心を問題にしないで、ものを追いかける。不純なる心、汚れた心、それを恐れずして、その客観の世界の集散のみを問題とする。

世尊にあつては道心のみが一貫する。人が集るか、散つてゆくかよりは、内なる道心の声こそ世尊の問題であつた。ああ、一貫の行歩。真心、真心、心心相続の一貫の歩みの権威。

汚いものに、汚いものが集る。清浄なるものに、清浄なるものが集る。依正不二、法界は唯心の所作である。

天、靈禽、乳粥を献ずる娘、草刈男、いちいちが絶対の価値において世尊正覚の記録にとどめられる。そして三世諸仏菩薩成道の公的儀式となる。

犬が肉を食う、ただそれだけである。猫が魚を食う、ただそれだけである。

世尊の正覚の前奏曲において、その聖なる行歩の上に与えられるものの、幾百万倍を与えられ恵まれるとも、価値なき凡夫の貪欲の歩みの前には、一文の価値すら認められずに食られてゆく。

世尊の絶対人格の表章として与えられたるものは、ただ一束の草ではなかつたか。沐猴もこうにして冠し、畜生にして絹布に座す。

物を貪り、物に囚われるは凡夫なり。

人生は物質に非ずと、心を知って物を知らず、物を軽んずる精神主義者は二乗なり。

その心豊かに尊くして、物の上に尊き価値を見るは菩薩である。

凡夫にあつても、人生は物であり、菩薩にあつても人生は物である。物こそ心の尊さの輝く舞台である。

人

世尊は、やがてよせ来る一切の悪魔の群と戦い、大悲のうちに一切を攝取して、正覺を成就したもうた。

その初転法輪において、鹿野苑に、先に去りし五人の従者、阿若憍陳如等あにやきようちんによを教化して、最初の仏弟子とせられた。これ大経の「尊者了本際、尊者正願、尊者正語、尊者大号、尊者仁賢」の五比丘ではないか。ここに、はじめて、仏法僧の三宝は成立した。

これより世尊は八十歳の入涅槃まで、一切衆生を度したもう。

貪欲の人、名利の人、愚痴の人等々は、そのまゝでは世尊の世界に入ることは出来なかつた。金剛不壞の大信、智慧、慈悲の清淨眞実より外、何ものも持ちたまわぬ世尊には、それに相応する尊者、菩薩が集つた。太子としての世尊の側にあつたものは、太子の行歩と共に去つて行つた。そしてついに独りであつた。しかしやがて世尊の周囲は、尊きもの、何ものにもゆるぎなき、清淨なる道の人、堅固なる眞実の人をもつて莊嚴された。洋々たる大海の如く廣大に。

汝、人の去るを悲しむなかれ。ただ汝の内心の不純を悲しめ。

汝、みだりに人を集めんと浮身をやつすことなかれ。

ただ、如来の教法に忠実に、一貫淳心の心心相統を尊ぶべし。

貪欲の人、名利の人、汝を去る時、眞実の人、汝を護るであらう。

問題は永遠に内にあり、歩みにあり。